廣瀬川

第88号
平成27年
11月10日

仙台市小学校長会　　発行者／古澤　康夫（会長）　責任者／丹治　重廣（広報部長）

主張

with a little help from my friends
― 今，子どもたちに育ませたいもの ―

副会長　成田　忠雄（片平丁小学校）

仙台市生活・学習状況調査によると，「自分にはよいところがある」という自己肯定感の有無を尋ねた結果は，震災前と比べると，各学年で２～８ポイント下回った値で推移している。これが震災の影響かどうかは不明だが，いずれにしても本市の子どもたちの自尊感情が低くなっていることは事実である。

自尊感情が低いと，「自分に自信が持てない」「自分は必要とされていない」「周りからどう見られているか気になる」など，様々な弊害が生じてくる。何故このように自尊感情が低い状況が近年目立ってきたのか。※1文部科学省の調査によると，核家族化や少子化の影響で，社会性の基礎となる部分，つまり「人とかかわりたいという意欲そのものが低下していること」に原因があるようだ。他の子と一緒に遊ぶことにより，自然に人間関係や集団のルールを学び，規範意識が醸成されていく。しかし，このような経験が幼少時に獲得されないまま就学して来ると，「他人を平気で傷つける」「ルールを守ることができない」「集団への参加を妨げる」等の，新たな問題を引き起こしてしまう場合もあるようだ。

それでは，自尊感情を高めるためにはどうしたらいいのか。ポジティブへの転換力がある人は，うらやましい限りだが，これは大人でも簡単なことではない。ましてや未発達の子どもたちだ。

それでは，周りの大人から褒めてもらうことで，子どもたちは自尊感情を高められるのだろうか。

これについては，いつでも好ましい結果をもたらすとは限らない。※2大人に褒められ自信をつけることができたとしても，実力以上に過大評価をしてしまったり，周りの子どもからの評価が得られなかったりすると，子どもは自他とのギャップにストレスを感じてしまう。

ここで，安定した自尊感情を獲得するのに必要なことは，他者や集団との関係の中で，自分の存在を価値あるものとして受けとめられる「自己有用感」という感情である。「認めてもらえてうれしい」「役に立ててよかった」「自分が必要とされていると感じた」といった自己に対する評価は，他者と関わる様々な実体験により得られ，自己肯定感とは区別して考える必要がある。学級や学年を超えた異年齢集団や地域との活動を意図的・計画的に組んでいくことで，このような自己有用感を感じられる体験を増やしていくことが大切だ。

友達から力を借りるということを考えたとき，標題にあるビートルズの楽曲を思い出した。いつの時代でも，周りの友達から認められ励まされることが，子どもたちにとっては大きな力になることを教えてくれている。

※1暴力行為のない学校づくりについて　文科省　平成23年7月
※2生徒指導リーフ18　国立教育政策研究所　平成27年3月

内　容

○主　　張 …… 1
○「市民防災の日」仙台市総合防災訓練 …… 2
○特色ある教育活動 …… 5
○学区紹介「地域とともに」 …… 9
○仙台市小学校教育研究会から …… 11
○新任校長所感 …… 12
○編集後記 …… 16

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

進んで考え行動することができる子どもに

栗林　八重子（北六番丁小学校）

1　青葉区総合防災訓練について

「６月19日午後６時，地震発生。停電の中での避難」という想定で，校庭と体育館等を使用し青葉区総合防災訓練が行われた。地域の方161名，学校職員も含め避難所運営スタッフ約50名が参加した。児童の一部も保護者と共に参加した。その中でも６年児童は，１週間後に実施される「児童による避難所運営訓練」の事前学習のために，避難所スタッフの動きや連携の様子を学びながら参加した。今年で３回目の避難所運営訓練は，連合町内会長さん方のリーダーシップのもと，各町内会，仙台地域防災リーダー，学校等のスタッフが運営各班の役割を担い，マニュアルに沿った活動ができていた。

参加した６年児童から，①暗い中，スタッフが協力して一生懸命に避難所運営をしていたこと，②地域の方がお互い顔見知りで，声を掛け合いながら動いていたこと，③授業で習った各班の動きとは違って，実際はいろいろなことが起きていて大変なこと，等の感想が聞かれた。その後，６年生は事前学習で避難所運営スタッフから班ごとの主な活動内容や何を考えて行動したらよいのかなどを教えていただいた。地域の方は，次世代の地域防災の人づくりのためにと，何回も学校においでくださった。児童は，日頃からの人同士の関わりの大切さや地域の強いきずなを感じたものと思う。

2　今後の学校経営に向けて

地域の方は「児童のために，学校のために」と積極的に関わってくださっている。また，児童は，授業の中で一人一人が地域と関わる活動を通して，「自分を見つめ自分のこととして考える学習」を行ってきた。その結果，児童は地域の良さを知り，良い町づくりや防災には，相手を知ること・人との関わりが大切であることに気付いた。そして，自分たちが行動することが大事であるという考えを持ち，地域貢献イベントなども実施してきた。今後も学校・地域が一つになって，「児童に地域を思う気持ちや，児童の自助・共助の力を高めるための思考・判断力が必要となる体験的な活動」を継続させて，定着化を図り，地域の方々と関わる力をより一層伸ばしていきたい。

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

総合防災訓練と学校経営

佐藤　朗（栗生小学校）

仙台市宮城地区総合防災訓練の会場として本校にお話をいただいたのが，昨年11月。これを学校教育の中で生かしていく一つのよい機会と捉え，お引き受けすることとした。事前の会議を重ね６月12日を迎えたわけであるが，その前提にあったものは，地域の防災に対する高い意識と団結力であった。

参加団体は28団体で，連合町内会が中心となり，消防団，警察，交通指導隊，各ボランティア団体等が参加した。宮城総合支所は，企画・運営の他，連合町内会を支える役目を担った。本校の教職員も多数が，各種訓練に参加協力した。当日の動きは以下のとおり。

16:00 発災型対応訓練準備，炊出訓練準備
17:00 避難所開設訓練準備　　18:00 地震発生
18:25 避難者が避難所入場開始　　18:40 避難者の避難所入場完了　　18:45 地震対応ＤＶＤ鑑賞及び非常食試食　　19:15 防災関係機関による説明
19:20 各種訓練開始（仮設トイレ組立，プライベートルーム組立，情報伝達訓練及び各種情報の受発信訓練）
19:50 閉会式及び後片付け　　20:45 解散

参加者は予定されていた訓練に参加し，手順を確認しながら協力して行った。本番さながらに真剣に取り組み，仮設トイレは予定の半分の時間で，組立を完了するほどであった。参加者も予想人数を大きく上回る約450名。大きな成果があったと言える。

大切なのは，防災教育の重要性が薄らいでいる中，校長がこの成果をどう具現化していくか，ということである。２週間後に以下の取組を行った。

６月27日（土）の午前中にフリー参観を実施した。３校時に全校一斉「防災授業」を，４校時以降，避難訓練・引渡訓練を保護者参加の下で実施した。これは災害時の対応のみならず，子どもたちが将来の地域防災の担い手になってほしいという意図もある。

大震災発生時に，小学校に通っていたのは現在の６年生だけとなり，その記憶のない子どもたちが大半を占めているというのが現状となった今，薄れつつある大震災の記憶をどう伝え，その教訓をどう生かしていくか。今後も，学校経営に生かす地道な取組が必要であると考えている。

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

宮城野区総合防災訓練を実施して

佐藤　由美（燕沢小学校）

昨年度，各町内会の避難場所の確認・避難所運営マニュアルの策定・地域合同防災訓練の在り方の検討を目的として，燕沢学区町内会連合会に防災連絡会を設置した。年間７回の会議には，連合町内会のほか，社会福祉協議会，区民生活課，避難所担当課，指定動員，消防署等，多くの関係機関が参加した。今年度も訓練当日まで全体会を３回，町内会単独で準備に向けての会議が３回ほど行われている。

６月６日(土)18:30の発災を受け，住民は「いっとき避難所」に避難。安否確認や要支援者の状況等は，黄色いハチマキを活用し社会福祉協議会と連携しながら，「いっとき避難所」で各町内会が把握した。

19:00過ぎ，単位町内会ごとに約450名の住民が指定避難所に集合した。区割りしたスペースに集合した住民は静かに整列し，真剣な表情だった。連合町内会防災担当者が取り仕切った本部会議はマイクを通して行い，参加した全ての方々が話し合いの内容を知ることにした。

訓練活動は，非常食の配給・仮設トイレの暗闇体験・給水車からの給水体験・エコノミー症候群を防ぐための簡単な体操等，各班・各担当が主体的に行った。避難者として参加した子どもたちも，PTAの協力の下，ペットボトルでの給水活動に参加した。

夜間訓練の一番の特徴は「暗い」ということである。「暗さ」に対する不安は日中にはないものだ。しかし，屋上に設置した災害時用太陽光発電装置により，ある程度の明かりが確保できた。電力会社の丁寧な説明から，災害時にも非常用の明かりを確保できることを知り，住民も安心していた。

学校周辺にある燕沢コミュニティーセンターと特別養護老人ホームは，それぞれが補助避難所，福祉避難所となっており，高齢者や要介護者の受け入れ等の協定を結んでいる。また児童館では長期化した場合に幼児の活動をサポートすることにしている。当日は，これらの連絡・移送訓練も同時に行った。

今後は，「いっとき避難所」で把握した情報を，早く正確に指定避難所へ接続する方法の改善に向けて，地域と共にマニュアルの改訂に努めていきたい。

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

総合防災訓練から学ぶ学校の役割

大泉　淳一（南小泉小学校）

平成27年６月13日(土)18時，夜間の発災を想定して南小泉地区及び南小泉小学校を会場に総合防災訓練が実施された。

本校の学区は，３つの連合町内会にまたがる18の町内会からなっている。また子ども会は10の子ども会から構成されているが，必ずしも町内会と一致していないところもある。各町内会住民の最終避難所は，指定避難所としての本校と南小泉中学校そして町内会との協議による他の施設（近隣の私立学校など）としている。今回の総合防災訓練には，本校を最終的な避難所としている７町内会が参加し，南小泉北部地区避難所運営協議会，南小泉小学校避難所運営委員会での事前協議の下に訓練が行われた。

地域住民主体の避難所運営による防災訓練は今回が初めてということだった。しかし，震災後に取り組んできた発災を想定した机上訓練や協議の積み重ねにより，自助と共助においてそれぞれが果たさなければならない役割が明確になり，訓練当日を迎えることができた。訓練には各町内会に所属する子ども会の児童も含めて約250人が参加し，地域の方々の防災に対する意識の高まりがうかがえた。

震災時は，多くの学校が児童の安否確認や授業再開の準備，避難所運営を並行して行わなければならなかった。しかし，今回の訓練では，地域の方々の自らの手で避難所を運営するという意識とともに，学校が児童の安全確保を最優先にして動けるようにという思いを感じることができた。学校としては，児童が複数の避難所に避難する可能性が確認できたため，児童に対する今後の防災教育の在り方や保護者への啓発，そして発災の際の教職員による安否確認の在り方など新たな課題も見えてきた。

震災後，本校では被災地の方々との交流などを通して防災教育を推進し，自助と共助の大切さを指導してきているが，まもなく小学校には震災経験のない児童が入学してくることになる。震災の記憶を風化させることなく，地域とのきずなを大切にして児童の安全･安心のために防災教育を進めていきたい。

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

「良働通心」で安全・安心・元気な学校づくり

中廣　治（柳生小学校）

本校は「地域との連携・協働」を学校経営の基盤として位置付け，開校初年度の学校運営指針の中にも「地域に開かれた創意ある学校運営の推進」を掲げています。そして開校16年目を迎えた今年度は，更に連携・協働を一層確かなものにするために「良働通心」を学校経営の中核にして，「安全・安心・元気な学校」そして「笑顔広がるあたたかい学校」をキーワードに，子どもの健やかな成長のため学校・地域一体となって学校経営を進めているところです。

平成23年の東日本大震災。当日，約500人の避難者が当校の体育館に身を寄せましたが，体育館の安全が確認できないことから一晩のみ教室を開放し，翌12日には各町内会集会所に避難所を移し，15日には学区内の避難所はすべて閉鎖したそうです。あのような混乱の中でも，整然と臨機応変に対応できたのも，平成11年から防災に関する取組を地域と共に推し進めてきたこと，そして学区独自の避難所開設訓練を震災前の平成22年から実施してきたことが大きな要因であることは言うまでもありません。そして今年度は関係各所の支援・協力の下，仙台市防災夜間訓練の機会をいただきました。

午後６時。２発の花火の号砲で地域一体となった訓練がスタート。本訓練の重点は，一時避難所での活動を充実させること。４町内会それぞれが設置している一時避難場所で安否確認，初期消火，瓦れきの中からの救出・救助，けが人の応急処置などを実施。地域住民にとって防災への意識と対処力・対応力，そして共同での活動力を高めるうえでとても意義深い取組となりました。学校を最終の指定避難場所としつつも，より早い段階で人的被害を最小限にするために「自主防災力」「発災対応力」の向上は不可欠です。また，濃煙体験，発電機・投光器を活用した照明，特設電話の設置・活用等備蓄倉庫内の防災用具をフルに活用し，これまでに実施できなかった新たな防災訓練に取り組むこともできました。

今後も地域と一体となり，「安全・安心・元気な学校づくり」を推進していきたいと思います。

「市民防災の日」
仙台市総合防災訓練

防災意識を持ち，地域の一員として地域防災訓練に参加する児童を目指して

畠山　厚子（住吉台小学校）

６月12日，本校を会場に仙台市総合防災訓練が実施された。「直下型地震を想定した初めての夜間訓練」である。悪天候にも関わらず約700名の地域住民（全体の８％）が参加した。その中に87名の本校児童（全校の約３割）の姿があった。

訓練の主な内容である。①第１次発災で一時避難所へ避難（午後５時）。②第２次発災で運営本部指示の下，学校に避難開始（午後６時）。③避難者名簿作成，体育館移動。④安否確認。⑤救護訓練等。児童は，地域の方々に見守られながら同じように救護訓練やエコノミー症候群予防体操等を体験した。

本校では，昨年度から児童一人一人が危機意識を持ち，地域の一員であることを自覚し，「自助」「共助」の力を身に付けることを目標に，防災教育に取り組んでいる。今回も，昨年度同様に町内会が中心となって一時避難所にいる児童の安否確認や地域の方々と防災体験ができたことは大きな成果である。

災害は，時と場を選ばない。児童の学校外での被災はいつでも起こりうる。児童を地域の一員として受け入れて実施される防災訓練は，町内会や地域の方々の深い理解と協力が支えとなり，本校の目標とする防災教育の具体的な取組が動き出している。

一方，①全体把握と指示までの時間。②町内会や子供会に未加入児童及び他校児童の確認方法等の課題も明らかになった。今年度は，計画から運営まで行政と連携した町内会主導の防災訓練であったこともあり，児童の参加については，保護者同伴としたことから全児童の参加とはならなかった。終了後，保護者不在の児童も地域が積極的に守らなければならないとの声が学校に多く届いたが，このことへの対応も大きな課題の一つである。

平成25年度に仙台市において指定都市小学校長会研究協議会が開催され，研究紀要や報告書には，東日本大震災からの教訓を生かした防災教育の重要性が取り上げられている。学校に求められていることは，教育課程を中心に防災教育を充実させていくとともに，家庭や地域と連携した防災教育の実現に向け取り組んでいくことであると考えている。

特色ある教育活動

原町小 柿の木応援団

長谷　一哉（原町小学校）

皆さん，原町小学校の「柿の木応援団」って聞いたことありますか？

原美　「原町の商店街に赤と黄色の旗が沢山飾ってあるけど，あれって何なの？」
柿男　「あれはね，商店街の方たちが柿の木応援団を盛り上げようと作ってくれた旗だよ。」
原美　「柿の木応援団って？」
柿男　「柿の木応援団っていうのはね，地域の人たちと原町小学校が一緒になって原町を盛り上げようという応援団のことさ。」
原美　「旗に人型の柿が描いてあるけど，あれはなあに？」
柿男　「あれはカキノキマンっていうのさ。柿の木応援団のシンボルマークだよ。商標登録もされているよ。」

原美　「それって，どんなことに使っているの？」
柿男　「旗のほかにも，カキノキマンシールが商店の入り口に貼ってあるし，原町小学校の子どもたちは全員カキノキマンのストラップを持ってるよ。それに，焼きごてもあって，入学式や卒業式の時に焼き印を入れたオリジナルのお菓子も作っているんだよ。」
原美　「そうなんだ。ところで，カキノキマンのストラップって何？」
柿男　「柿の木応援団の誓いの言葉が書いてあるのさ。自分たちも地域を盛り上げる一人として，自分たちができることを言葉にしてるんだ。」
原美　「へえ～，そうなんだ。その誓いの言葉ってどんな言葉なの。」
柿男　「簡単に言うと笑顔，感謝，元気な挨拶だよ。」
原美　「明るい笑顔と元気な挨拶。そして，感謝の気持ちで原町を盛り上げようということね。
　ところで，応援団って言うんだから団長さんもいるんでしょ。」
柿男　「もちろんさ。団長さんだけじゃなく，いろいろなお世話をしてくれる事務局の人たちもいるし，それ以外にも地域の沢山の方たちが協力してくれるんだよ。」
原美　「地域の応援団の人たちはどんなことをしているの。」
柿男　「原町小学校のためにいろんなことをしてくれるよ。たとえば，地域学習の講師とか，１年生の学習や生活のお世話とか。ボランティアさんを探してくれたり，お店で弟子入り体験もさせてくれるよ。それから，登下校の時に見守りもしてくれるし，故郷復興プロジェクトでは折り鶴の仕上げもしてくれたよ。」
原美　「沢山応援していただいているのね。」
柿男　「そうなんだ。だから，僕たちも自分たちができることを積極的に行って，この原町を盛り上げるんだ。そうそう，５年生は商店街の大通りにある花壇に地域の人と花も植えているんだよ。」

【カキノキマンより（一部抜粋）】
「私は，カキノキマン。仙台市立原町小学校で生まれたんだ。原町小学校は長い歴史と伝統がある学校なんだ。校庭の真ん中に生えていた柿の木は，子どもたちや地域の皆さんにとても愛されていたんだよ。原町小学校と言えば，「柿の木」というようにね。……平成９年６月のある夜。とても強い風が校庭で吹き荒れ，樹齢約120年の柿の木は倒れてしまったんだ。……それから10数年後。ある女の子のアイデアで誕生したのが，私。
柿の木応援団というのは元気な挨拶とすてきな笑顔で原町を応援する原町小学校の子どもたちのことなんだよ。そして，そんな子どもたちを見守ってくれている原町の人たちのことでもあるんだよ。私は，そんな柿の木応援団のマスコットかな。
柿の木応援団の合い言葉は『知恵だせ』『汗だせ』『勇気だせ』なんだ。みんなで力を合わせて，原町を盛り上げようよ。」

柿の木応援団とは？
「杜の都の学校教育」の推進の基盤：「地域とともに歩む学校」に示されている①児童のより良い学びのために，小中連携を軸に学校が積極的に家庭・地域と連携し，豊かな教育環境の創出を目指す「学びの連携」を推進する，②「学校支援地域本部」など学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制をつくり，信頼される学校づくりとともに魅力ある地域コミュニティの構築に寄与する，という考えに基づいた原町小学校で推進する双方向の地域連携体のことです。

特色ある教育活動

地域とともに「防災を中心とした地域連携」

津久井　隆之（将監西小学校）

1　はじめに

本校は，東日本大震災後，校舎が使用できなくなり，その年の11月まで隣の桂小学校の校舎で学習し，11月からは，校庭に建てられたプレハブ校舎で25年の３月まで授業を進めてきた。そして，その年の４月に本校舎に戻るとともに，私も校長として着任した。しかし本校舎に戻ったものの，26年の４月までは，整備のために校庭がほとんど使用できず，体育の授業や休み時間の遊びなど，子どもたちの心身の健康に大きなハンディを背負ってしまった。そのような中，子どもたちが生活しているこの将監地区において，この震災が将来の子どもたちのために少しでもプラスとなるような取組が重要であると考え，地域との連携を重視してきた。

2　防災を中心とした地域との主な連携

(1)　地域ぐるみ健全育成推進協議会「～震災に学ぶ地域の中で共にできること～ＰＡＲＴⅢ」

(2)　将監地区防災訓練（授業参観日）

3　具体的な取組

(1)　昨年度で３年目となった「～震災に学ぶ地域の中で共にできること～」では，中学校区４校（小学校３校・中学校１校）の代表児童・生徒と，町内会長・ＰＴＡ会長・各学校教員が集い，各学校の防災学習や地域の防災対策について発表した後に，グループ討議を行っている。

グループ討議では，小学校単位に分かれ，各町内会長と中学生のリーダーを中心に，「日頃から感じている地域で共にできる防災」についての話合いを行い，活発な討議が展開された。

討議の最後には，それぞれのグループで話し合われたことを紹介し，今後の地域防災のために取り組んで行くことなどについてもまとめることができた。

グループ討議
「地域でともにできること」について，活発に話合いが行われた。

(2)　昨年度の地区防災訓練は，将監地区の町内会が合同で将監小学校を会場にして，非常時の避難所運営を中心に実施された。そのため，参加者は各町内会の役員を中心にしたお年寄りが主になっていた。そこで，今年度会場となる本校の時には，ぜひ，子どもたちも参加できるような防災訓練を実施したいと申し入れ，今年度実現することができた。

子どもたちの避難訓練の様子を地域の方々が参観した後に，開会式。

①　内容（児童の主な活動）

１校時：防災の授業参観（全学年）

２校時：避難訓練，開会行事，消火器訓練等

３～４校時：１～４年生通常授業

５～６年生各防災訓練に参加

○　バケツリレーや，避難所の各班に分かれて参加（アルファ米や飲料水の配布，応急手当の講習等），訓練後の後片付け

地域の方々とバケツリレー
「水道が止まった時，みんなで協力してプールの水を運びます。大切な水，こぼさないように!」

②　課題

本年度実施した「児童を交えての地区防災訓練」は初めてであったため，納得のいく防災訓練とは言えなかった。特に次のような課題が残った。

○　学校は，地域との連携を大切にという基本路線で臨んだが，実行委員会としては，避難所運営が主体の訓練が目的であったため，訓練内容を変えることが難しく，地域と子どもたちが積極的に関わっての訓練とまではいかなかった。

○　１校時目の授業参観を通して多くの保護者が来校したが，訓練の受け入れ（場所の確保や人数制限）が難しく，保護者も積極的に参加する総合防災訓練まで発展しなかった。

4　おわりに

子どもたちは，今後この将監の地で活躍が期待される地域の宝（人材）である。地域防災を考える上でも，特に今回の「地区防災訓練」は，その第一歩であり，地域の中で互いに助け支え合う心を身に付ける教育活動を，今後も積極的に行っていきたい。

特色ある教育活動

地域の教育力を生かした学校経営

近澤　裕子（加茂小学校）

1　はじめに

本校は，泉区にあり，児童が千名を超えた時期もあったが，現在は児童数441名。高齢化が進む地区，加茂の県営住宅，上谷刈のマンション・アパート，農家，今年４月入居開始の復興公営住宅がある。多忙な保護者が多いが，リタイアした世代を中心とした地域の教育力が高い。長年に渡り，地域と連携しながら教育活動を進めてきているが，近年，これに加えて小中連携，幼保小連携に努めている。

2　学校のサポート団体との連携

⑴　加茂中学校区学校支援地域本部

市内の中学校区学校支援地域本部の先駆けとしてＨ21年発足。Ｈ24年に文部科学大臣賞受賞。スーパーバイザー１名，加茂中，虹の丘小，加茂小を担当する地域在住のコーディネーター３名が各校との連絡調整に当たっている。

小１生活・学習サポート，懇談会時の児童の一時預かり，低学年スポーツテストの補助，生活科昔遊び支援，夏休み明けの応募作品の仕分け，６年総合の家庭訪問先の仲介等，人選と依頼をお願いしている。

⑵　加茂っ子クラブ放課後教室

地域住民によりＨ21年発足。週１回程度図工室で放課後遊びを支援。例年40名前後が登録。

⑶　そのほかの学校支援のボランティア団体等

登校を見守っていただく学校ボランティア防犯巡視員の方々。木曜朝に各学級で絵本の読み聞かせをしていただく「おはなしはあと」，歌い聴かせをしていただいく「さんぽ」。父親有志による「お父ちゃんの会」。上谷刈の農家には，長年に渡り，５年総合の稲作体験をお願いしている。

3　地域の諸団体との連携

⑴　長命館公園サポーターズクラブ

長命館公園と里山の維持管理を行っている。生活科や３年総合で公園の歴史や自然についてガイドをしていただいたり，話を伺ったりしている。

⑵　加茂学区民体育振興会

10月の地域の運動会には，親子も大勢参加してにぎわう。加茂市民センターと校庭を会場に１月実施の「たこ作りたこ揚げ大会」も，親子でにぎわう。

⑶　そのほかの地域の諸機関

加茂児童センターの児童クラブには，今年度は64名が登録。大地震発生時の避難について一昨年学校と取り決めを行った。10月の加茂市民センター祭りでは，加茂小児童の絵画を展示する。

4　中学校区の小学校２校･中学校との３校連携

⑴　教員同士の情報交換や相互の授業参観

児童を送り出す３月末及び中学校の担任が生徒の実態を把握する５月頃の年２回，中１の生徒に関する情報交換会を実施。また，小中の教員が相互に授業を参観したり，校内研修会に参加したりする。教務主任同士で年間の日程を調整している。

⑵　児童と生徒との交流

９月の市陸上記録会の練習期間に６年生が中学校の陸上部員から指導を受ける。11月には６年生が中学校に行き授業を参観，部活動も見学する。

5　加茂中学校区３校PTA連絡協議会

協議会は，年２回の定例会で情報交換をする。今年５月の会議では，道路交通法の改正及び加茂中が自転車通学の１年生にヘルメット着用を義務付けたことが話題になった。児童にもヘルメットの着用を推進しようと，泉区自転車交通安全モデル地区協議会と３校ＰＴＡとの連名で，両面カラー刷りのお便りを作成，夏休み前に各校保護者に配布した。

6　幼稚園・保育園との連携

１年生が生活科で幼稚園・保育園を訪問，小学校生活について園児たちに教える会を持つ。また，園児たちが来校，小学校の授業の様子を見学する。

7　おわりに

校長室には地域の諸団体の方々が気軽に訪れ，お茶を飲みながら児童について語り合うことが多い。

また，加茂中，虹の丘小とは，校長同士，教頭同士，教務主任同士が気軽に電話で情報交換している。

歴代校長が築かれた地域とのきずなを受け継ぎ，保護者やＰＴＡとの信頼関係を大切にしながら，これからも子どもたちのために，積極的に，地域，小中，幼保小連携を推進していきたい。

特色ある教育活動

絆　―地域とともに―

佐藤　智則（富沢小学校）

平成22年４月，富沢小学校は西多賀小学校と大野田小学校を母体に仙台市内125番目の小学校として開校し，今年度，６年目を迎えました。地域住民は，昔から住んでいる方もいますが，ほとんどが宅地化の進展と共に移り住んできた方々です。現在全校児童は約620人ですが，地下鉄富沢駅西土地区画整理事業工事が進行しており，今後更に児童の増加が予想されています。

本校では開校から学校経営の重点として二つの柱を掲げてきました。

一つ目は「健康教育の推進」です。平成23年より仙台市健康教育推進校として指定を受け，「運動に親しみながら進んで体を動かし体力を高めようとする子ども」「食習慣を大切にする子ども」「健康に関心を持つ子ども」を柱に，自ら健康な体づくりに取り組む児童の育成を目指してきました。平成25年度には，全国学校体育研究最優秀校を受賞，さらに平成26年度には，健康教育推進学校優良校を受賞しています。毎週火曜日と金曜日の朝に行われている「ハッスルタイム」では，全校児童が様々な運動に取り組んでおり，体力向上はもちろんのこと，学力向上にも大きな効果があることを実感しています。

二つ目は「地域とともに歩む学校」です。開校２年目の平成23年度に学校支援地域本部が立ち上がり，「りんく！とみざわ」として活動をスタートしました。現在PTA本部役員や委員を経験された方４名がスーパーバイザーとして，大きく３つの事業を取りまとめています。

その中の一つ，「学校支援事業」として登録していただいている学習サポーターは，今年度120名，職員室前の廊下には，皆さんの顔写真がずらりと掲示されています。朝読書の読み聞かせや登下校時の見守り隊，ミシン，習字，図工や体育等の学習サポートはもちろん，クラブ活動や陸上教室，学芸会や運動会の衣装作りなど活動は様々です。年度当初に37項目のうち，どのサポートを希望するかあらかじめ登録していただき，その時期になるとスーパーバイザーからの連絡を受けて活動していただいています。年度末の反省会では，転勤して知り合いもなく不安な思いで子育てしていたが，サポーター同士のつながりができとてもよかったこと，多くの子どもたちや先生と関わることができ大変有意義だった等の感想が寄せられました。中には，子どもたちが卒業した後も地域の人としてサポーター登録をし，活動を続けてくださる方も増えてきました。

「放課後子ども支援事業」では，毎週月曜日に「とみざわいわいクラブ」を開催し，放課後の子どもの居場所づくりを行っています。そのほかにも「合唱クラブ」や手芸サークル「クラフトキッズ」「親子囲碁クラブ」和太鼓クラブ「子すずめ楽鼓クラブ」など様々な活動が行われています。地域の様々なお祭りやイベントに，合唱クラブや和太鼓クラブが参加し歌や演奏を披露する場をいただき元気な子どもたちの姿を地域に発信しています。

「土曜図書開放事業」では，土曜日の午前中に図書室を開放しています。大人向けの本も用意したり，読み聞かせなどのイベントを工夫したりして利用者は少しずつ増加しています。イベントをきっかけに父親と一緒に本を借りに来る子どもたちも多くなってきました。

さらに，父親が学校と積極的に関わる場として「親児の会」が結成され，平成23年度から活動しています。夏のデイキャンプや冬の餅つき大会などを企画・運営し，子どもたちと積極的に関わるとともに，父親同士のつながりも充実させています。

年度初めの朝会では，「りんく！とみざわ」に関わる多くの皆様を紹介しました。子どもたちは自分たちが多くの方々から見守られていることを実感することができました。そんな中で子どもたちが考えた学区民運動会のスローガンは，「とみざ輪～ふかめよう地域の絆～」です。

今後も子どもたちのより良い姿の実現のために多くの保護者や地域の皆様に関わっていただくとともに，富沢地域の絆が一層深められるよう学校経営に努めたいと考えています。

学区紹介　地域とともに

スタートラインに立って

熊本　清孝（国見小学校）

平成24年８月から25年６月までに計６回にわたり貝森小学校地域懇談会が開催され，「貝森小は国見小と統合する」との結論が出された。これを受けて，平成25年９月から27年２月までの計７回，統合準備委員会が開催され，統合へ向けた課題解決のための協議と調整が行われた。その過程において，貝森小と国見小の平成27年度統合が市の政策として示され，平成26年３月の仙台市議会において統合が承認された。

ここまでが，言わば貝森小と国見小の統合が制度として成立するまでの過程であり，児童や地域の今後について保護者・地域・学校・行政が一緒に考え，積極的な意見交換がなされた２年半である。

この間，学校現場においては，地域懇談会の結論及び統合準備委員会の発足を受け，平成25年10月から２校合同会議を計５回実施した。合同学習等による児童間交流の進め方や両校の特色ある活動を取り入れた年間指導計画の作成，指定通学路の見直し及び安全対策，設備・備品等の再活用と移設・移動計画，配慮を要する児童の対応と教育環境の変化に対する不安や願いについて検討してきた。

特に，児童間交流については，できるだけ早い時期から効果の上がる交流を実施したいとする両校教職員の考えが一致したことから，第１回合同会議の翌月の平成25年11月から統合前年度まで，特別支援学級・学年・全校単位等で合計28回計画し，27回実施した。これは，両校児童の統合に向けた準備となり，教育環境の変化に対する不安を軽減または払拭し，統合へ向けた児童の期待感を高めることとなった。

統合へ向けた貝森小との連携に際し，全教職員に繰り返し指示したことは，「不安を感じながら学校を閉じてくる貝森小の児童・保護者・教職員・地域の気持ちに寄り添うこと」であった。同時に，校長として下記の①②の実現に最大限の努力をした。

①児童の不安感を取り除き，スムーズな引き継ぎや対応が可能となるように，貝森小から国見小へ異動する教職員をできるだけ確保する。

②児童の受け入れ体制を強化するため，主幹教諭の役割を教務主任から生徒指導主任に変更するとともに，統合後加配を活用して教育相談チームによる組織的対応を強化する。

統合後，登校初日は，平成27年４月６日の「迎える会」だった。この日は，旧貝森小から国見小へ移籍した新２年生から６年生71名が沿道の大勢の保護者や地域の皆さんに迎えられて集団登校した。

春休み中，教職員総出で教室整備や備品等の整理に努めたかいあって，登校初日はとても良い雰囲気の中スタートした。統合へ向けて様々な角度からお世話いただいた皆様に感謝しつつ，児童・保護者・地域の皆様が統合して良かったと思えるような学校となるよう努力していきたい。

学区紹介　地域とともに

統合を迎えるにあたって

廣瀬　清文（生出小学校）

今春４月，本校は坪沼小学校と統合し，新たな歴史を歩み始めることとなりました。

全校児童89名，自然環境に恵まれ，小規模校ならではの良さがたくさんあります。しかしながら，その反面，児童の人間関係が固定化したり，関係修復が困難な場面が生じたり，クラス替えがない少人数学級ゆえの課題も感じてきました。

そのため，統合の良さを地域の皆様方に感じていただくためには，児童同士の良好な関わりを構築していくことが最優先と捉え，本校としての最重要課題としました。

また，それらの取組の「見える化」を図ることによって，地域の皆様方の御理解を深めたいと考え，市教委には予算も確保していただきました。

主な取組としては，統合準備期間であった昨年度は，児童も教職員も統合へ向けて「心一つに」というテーマを掲げ，年間12回の交流学習を実施し，両校児童のより良い関係構築に努めてきました。児童同士が互いのきずなを深めていくそれらの交流の様子をカラー版の新聞にまとめ，学区内全戸に配布し，「見える化」にも努めました。

そして，統合を迎えた今年度は，更に関わり合いを重視し「励まし合う，学び合う，高め合う児童」の育成を目指し，全職員が心一つに「チームとして指導にあたる」ことを強く意識しています。

ＯＪＴの推進もねらい，全学級の「ＱＵ」の分析と学級経営の改善点を検討する校内研修も実施しました。「チームとして児童を育てる」という小規模校の強みを共有できたような気がします。

特に，坪沼にお住まいの皆様には，児童がより良く関わり合う姿を御覧いただきたいという願いがあり，全学年が坪沼地区における校外学習を実施しました。新たな学区となった地域の皆様と触れ合うことはもちろん，実際に児童の活動の様子を「見える化」することによって，統合による新たな歩みを感じていただきたいと考えました。

このような取組により，ようやく統合元年としての始めの一歩を踏み出せたような気がします。今後もチーム一丸となって，地域と共に歩む，信頼される学校を目指していきます。

学区紹介　地域とともに

荒浜小学校の今

櫻場　直志（荒浜小学校）

平成26年度は，開校140周年記念行事の開催，神戸での「小学生防災教育発表会」への参加や，世界防災会議における防災学習の発表等を通して，子どもたちは多くの力を身に付けることができた。平成27年度，在籍数は16名と減少したが，子どもたちは朝夕のスクールバスで元気に通学している。東宮城野小との交流学習は今年度も更に進み，昨年度から始めた七郷小との交流も，学校全体のほか，学年ごとに適宜実施日を設け活動するまでに深まってきた。

８月１日現在，仮設住宅から通学する児童は11名，自宅再建４名，公営復興住宅は１名である。仙台市の震災復興計画最終年度にあたり，年末にかけて，多くの児童が七郷地区周辺に転居する予定である。

たくさんの支援を受けて子どもたちは成長を続けている。しかし，学校の内外で間借り生活を強いられている子どもたちは，現在でも少なからずストレスを抱えている。そこで，学校運営の大きな柱として，「楽しい学校」を掲げ取り組んできた。その一つ

が月山での「林間学校」である。（学校行事）今年は５年生がいないので，それならばと，７月21，22日に全員参加で実施した。

雪渓を登ってのハイキング，サイクリング，ニジマス釣り，星空観察等，夏の楽しい思い出の一つになった。

９月６日には，５年ぶりに「荒浜学区民大運動会」を開催した。地域コミュニティ再生の一機会になればと，学校から地域に働きかけ開催する運びとなった。子どもたちは，昔から「熱い」と言われた運動会の雰囲気を味わい，きずなを深めながら「ふるさと荒浜」を感じることができた。

平成28年３月26日，開校から143年の歴史に幕を閉じる。在校生のみならず，卒業生や地域の方々の思いは重く大きい。これからやらなければならないことは山ほどある。荒浜校舎を含めた物品の保管転換。歴史的に価値のある物の保存，移動。記録や記念品の作成等…。

15名の職員の約半数が，大震災当時から本校に勤務を続けている。そして，職員一丸となって子どもたちの笑顔のために日々奮闘している。

学区紹介　地域とともに

ふるさとへの思いを胸に

三塚　修（中野小学校）

平成27年度，中野小学校として最後の１年を迎えた。本校は開校142年という歴史の中で，これまでたくさんの卒業生を送り出してきた。その中には，父母あるいは祖父母の代から２代，３代にわたって中野小出身という家庭も多い。それ故に，震災によって学校が閉校せざるを得ない状況になってしまったことに対しては，それぞれ言葉では言い尽くせない様々な思いを抱いていることと思う。

地域もこうした学校の現状に呼応するかのように，すべての町内会の年度内解散が正式に決まった。

学校においては，昨年度よりかつて子どもたちの生活の拠点であった蒲生干潟や校舎跡地へと足を運び，地域の自然や歴史について調査し，そのすばらしさを発信する活動を全学年で行っている。震災後この場所が災害危険区域に指定され，再びこの地に戻って生活することができない現実から，もう一度自分たちの生まれ育った『ふるさと』を実感させたいと考えた。

蒲生干潟での活動では，どの子も生き生きと目を輝かせ，野鳥や水辺の生き物，植物等の観察・調査に没頭する姿が見られる。また，こうした活動を通して，震災前の干潟に徐々に戻りつつあることや，逆に人が放置するゴミの多さに子ども自身が気付くなど，改めて蒲生干潟が持つ自然の魅力と学習教材としての価値を感じる。

子どもたちは事後の作文や振り返りの中で「今日ぼくたちはふるさとに行ってきた。」と表現する。現在，仮設住宅を出て復興住宅や代替地へ転居する家庭が増えている中，「自分にとってのふるさとは蒲生」，そう子どもたちは考えている。

昨年末，児童会を中心に蒲生干潟の環境をより良くしようとの声が高まり，全校清掃や環境保全を訴える看板設置案が提案された。看板制作には，話を聞きつけたNPOの方々が協力してくださり，今年２年越しで完成にこぎ着けた。モザイクアートとして約１万個のタイルを敷き詰めて完成した畳１畳分ほどの看板は，来年８月校舎跡地に作られる公園内に設置の予定である。

閉校までの残り約７か月，こうした取組を通して自分たちのふるさとに誇りを持ち，自らの言葉でそのすばらしさを語れる，そして更には，将来にわたってふるさとを大切に守ろうと自らが主体的に関わっていく，そんな子どもを育てていきたい。

仙台市小学校教育研究会より

子供たちの未来のために

仙台市小学校教育研究会　会長　河原木　美智也（立町小学校）

本研究会は，仙台市小学校教育振興のため各部会の連絡提携を基に，研究活動の推進を図ることを目的としている。本研究会を構成する22の部会では市内の会員が切磋琢磨しながら教育実践を積み重ね，授業研究を柱に教育研究会を開催している。また，「夏休みドリル帳」の編集を行い，長期休業中の児童の学習に役立たせている。

1　各部会の研究主題と主な仙台市大会について

国語確かな「ことばの力」を育む魅力ある国語教室の創造～実生活で生きて働く言語活動の充実を通して～。社会自ら社会に参画する資質や能力の基礎を培う社会科学習。算数算数的活動を通して，数学的な思考力や表現力を育てる指導の工夫。理科科学する楽しさを体感できる子供の育成～実感を伴った理解を目指して～。生活･総合地域の一員として主体的に関わり，共に生きる力を育む生活科・総合的な学習の時間～子供と地域をつなぐ豊かな学びを創出する単元づくり・授業づくりを通して～。音楽分かち合おう！音楽の喜び。図画工作「みる」で輝く子どもの世界。家庭未来を創り出す豊かな心と確かな実践力を育む家庭科教育～学びを生かし，自ら生活を豊かに創造する子どもの育成～。体育自ら学び，運動の楽しさや喜びを味わえる体育学習を求めて～学習過程の工夫を通して～。書写基礎基本を習得し日常生活に生かす書写学習～誰もができる書写指導を通して～。道徳自己を見つめ，共によりよく生きる子どもを育てる道徳教育。特別活動集団の一員として目的意識を持ち，自主的に活動する子どもを育てる特別活動。学校行事かかわりあい，ささえあう学校行事の創造～豊かな社会性の育成を目指して～。学校図書館豊かな心と学ぶ力を育てる学校図書館の活用～主体的な読書活動の推進～。保健自ら進んで健康づくりに取り組む児童の育成を目指して。視聴覚豊かな学びを創る情報活用型授業の展開。学校給食食を大切にする心をはぐくみ，健全な心身を培う食育の推進。特別支援教育復興に向けて，生き生きと学び，輝く子どもを育てる特別支援教育のあり方を求めて。生徒指導生きる力を育む生徒指導の在り方～生徒指導の機能を生かした学習活動を通して～。統計教育統計資料を生かして主体的に課題を解決する子どもの育成～統計的な見方・考え方が身につく授業づくりをめざして～。外国語活動英語に慣れ親しみ，進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成。学校事務創り出そう！こどもの学びを保障する経営事務を～事務処理の標準を目指して～。

今年度，宮連小教研に待望の「外国語活動部会」が発足した。仙小教研ではすでに平成22年度に発足している。平成28年２月12･13日には，「全国小学校英語活動実践研究大会　仙台大会」が開催される。次期学習指導要領の答申の素案が発表され，本大会が，全国からますます注目されているところである。喫緊の課題に迫る第一歩に資するところ期待は大きい。また，平成27年12月３・４日には，「東北小学校生活科・総合的な学習教育研究大会　宮城大会」が仙台市を会場に開催される。

その他，仙台市を会場とし，開催する大会は次のとおり。宮城県小学校特別活動研究協議大会，宮城県放送教育研究大会・宮城県小中学校視聴覚教育研究大会。

2　より一層実りある講演会を目指して

平成14年度から隔年で実施してきた仙小教研・仙中教研合同講演会は，昨年度，宮城教弘塾との共催で開催した。しかし，「宮城教弘塾in仙台」は平成26年度をもって終了し，今年度は新規事業として「教育文化講演会 in 仙台」として，平成27年８月３日に開催した。今後も，教弘塾から受け継いだ「教育の不易と流行～教育は人なり～」というテーマを大切にしながら取り組んでいきたい。

3　おわりに

今後とも，仙台市小学校教育研究会の充実・発展のため，そして何よりも，復興の担い手となる子どもたちのために，子どもたちの未来のために，会員一人一人が研修を積み，教師としての指導力を一層高めていく必要がある。

そのためにも，各部会の連携・協力をより一層密にし，会員一人一人の専門性と実践力の向上を目指した教育研究会でありたい。

新任校長所感

震災から学び，復興に取り組む学校経営

教訓を風化させない

早坂　忠好（金剛沢小学校）

震災当時，私は片平丁小学校に勤務していました。幸い校舎の被害等は軽微で済みましたが，地域住民の方々や帰宅困難者の受け入れに奔走したことを昨日のことのように思い出します。最も多い時で1,400名ぐらいの方々を体育館や校舎に受け入れました。水や食料の確保，トイレの問題など多くの困難に直面しました。そんな中，当時の校長は冷静に状況を把握し，的確な判断や指示をしていました。その時の姿や指示された内容は，今の私にとって貴重な教えとなっています。

あれから４年，この４月に金剛沢小学校に着任しました。そして早々に当時の避難所の状況や混乱等を多くの方々から耳にすることができました。

昨今，震災の風化が話題となっていますが，それは学校現場においても同じことが言えるのではないかと思います。微力ながら私は，「風化させない」をキーワードに本校の防災教育・防災に対する備えづくりに取り組みたいと考えています。そのためにも当時の経験や証言，資料等を大切にし，本校独自のカリキュラムづくりや非常時の体制，マニュアルづくりに生かしていきたいと思います。

実践はまだまだ途上ですが，本校の職員や保護者，地域の皆様と意見を交わしながら防災教育も含め，学校経営にしっかり当たっていきたいと思います。

人と人との絆を大切に

石山　芳毅（川前小学校）

震災当時は，幸町小学校の教頭でした。震災の日から約１か月，体育館はもとより教室も避難所となりました。その時とても支えになっていただいたのが，地域の方々です。炊き出しや避難物資の仕分け作業等はもちろんのこと，発電機やポンプなど必要なものを探し出して学校に運んでいただきました。本当に一言では言い表せないほど感謝の気持ちでいっぱいです。これも日頃からの学校と地域の強い信頼関係があったからこそだと思います。

防災副読本にその当時の避難所の様子が掲載されています。現任校は，ほとんど震災の影響は受けていません。それだけに余計，子どもたちには被災を他人事として受け流さないこと，いつ，どこでどのような災害に遭遇しても，自分で判断し適切に行動できる力，すなわち自助・共助の大切さを防災教育の充実を図りながら，しっかりと学ばせていかなければと思います。さらに今年度の中学校区の協働型学校評価の重点目標でもある「関わりを深めて，認め合い，高め合おう」の下に，子どもたちには，地域の行事にも積極的に参加させながら，人と人とのきずなの大切さをしっかりと学び取り，この生まれ育った地域を愛し，ゆくゆくはこの地域の担い手となるよう成長させていくことが，学校の果たす大きな役割の一つだと考えます。

日頃の授業で児童を育てる

二階堂　裕（芦口小学校）

震災後４年半。震災では，学校経営の重点の一つは，「未来に向かって前進し，課題（困難）を解決する意欲と態度の醸成」であることを心に刻んだ。

この考えに基づき，校長として特に①日頃の授業の充実，②情報モラル教育の充実の２点を教職員，保護者，地域に周知し，学校経営に取り組んでいる。

日頃の授業の充実のための一つとして，良い授業のチェックシート（項目抜粋：①学習課題やめあてを板書する，②課題に対する考えを全ての児童に持たせた後，次の学習に進む，③児童が自力で課題を解決する時間を十分与える，④児童の発表は，担任ではなく，他の児童に向け，はっきりと言わせる，⑤デジタルコンテンツを活用する等）を教職員に配付している。

情報モラル教育の一つとしては，協働型学校評価重点目標を「ノーテレビ，ノーゲーム」にし，学校，地域，保護者が同じ土俵で責任を持ち，主体的に児童を育てるように，方策を具体的に設定している。例えば，保護者は，「家庭でノーゲーム，ノーテレビのレベル（レベル１　食事中はテレビを消す～レベル５　一日中テレビを見ない。ゲームをしない）を決め，実行する」である。

他にも道徳の教科化，アクティブラーニング，危機管理等の課題が山積するが，笑顔でチーム芦口として，全力対応していきたいと考える日々である。

危機意識の地域差

木越　研司（北中山小学校）

震災当時に勤務していた学校では，津波の被害はなかったものの約2000人の地域住民等が避難してきた。体育館は満員状態だった。震災前から地域と学校が一緒に防災訓練・避難所開設訓練を重ねてきたこともあり，地域住民が主体となった避難所運営が行われた。訓練の成果だと思った。

前任校では，学区の一部に津波が押し寄せた。また津波被害の大きかった地域からの避難者を受け入れる大規模な避難所となり，救援活動の最前線でもあったと聞いている。大変な状況を経験しているだけに，住民の危機意識は高く，地域住民が主体となって大規模な学校・地域合同防災訓練が行われた。

学校としても，文部科学省の研究開発学校の指定を受け「防災安全科」の新設に取り組んだ。

北中山小学校区では，３月11日の地震で発生した土砂崩れに巻き込まれて地域の方が一人亡くなっている。広範囲に渡る被害がなかったためか，地域の防災訓練等の取組は途上の段階である。

震災以降，３つの学校に勤務した。地域によって危機意識に大きな差があると感じる。地域の被害状況を踏まえ，備えあれば憂いなしだが，杞憂となってはいずれ危機意識は低下してしまうだろう。後生の命を守るために，震災時の状況を語り継ぐことが，今の我々にできることの第一歩だと思う。

つながる，広がる　～そして未来へ

石原　恵一（南中山小学校）

本校は，昭和60年４月泉市立南中山小学校として誕生し，泉市の仙台市への合併により，昭和63年に仙台市立南中山小学校となり，今年で開校30周年を迎えています。

その歴史の中で，様々な「つながり」が生まれました。PTAとのつながり，地域のつながり，多くの団体とのつながり，そうした「つながり」から子どもたちの応援団として南中山小学校を支えるすばらしい教育環境が醸成されてきています。大きな被害はなかったものの，５年前に東日本大震災を経験して，地域の人たちは地域と学校の深い結び付き「つながり」が大切であると実感していると思います。今後，更に学校と地域の融合を図り，学校支援地域本部事業を根幹に据え，地域の人たちと教育活動参加型の連携を図っていきたいと考えています。

また，縦の「つながり」として小中学校の学びの連携も大切であると考えています。義務教育９年間

を通して未来を生き抜く力を身に付けられたらと考えています。この30年間で卒業生も昨年まで2,864人を輩出してきました。社会の第一線で活躍する人材となり，日本各地だけではなく世界へと羽ばたいています。こうした広がりが未来永ごうに続くことを願い「つながる・広がる・そして未来へ」をスローガンに学校経営を進めています。

東日本大震災から 4年半が経過して

佐藤　顕義（高森東小学校）

4年半前，何気ない日常の風景を一瞬のうちに変えてしまった東日本大震災。あの時，揺れの大きさにおびえながらも泣くこともままならない1年生を，昇降口の所で必死に守ろうとしたことを覚えている。『早く揺れが収まってくれ！』このことだけを念じながら，揺れが収まるのを待っていた記憶がある…，その後に来る津波のことなど予想だにせず…。

あの時，私の勤務していた学校は高台にあり，その後の津波の被害を受けることはなかった。しかし，もし沿岸部の学校だったら，児童の命を守ることができたのだろうか？と，自問せずにはいられない。

あの震災以降，地震と津波は一組になって脳裏に刻まれた。地震が起きたら…，津波が来ると分かったら…，教師，児童の中にもその瞬間への対応について，まさしく我がこととして身に付いた。現在でもそのはずだった。しかし，4年半という時間の流れが震災の姿を風化させているように感じる場面に遭遇することがある。本当に地震が起きたら，津波が来ると分かったら…，本当に児童の命を守ることができるのだろうか。何年たっても，学校が児童の命を守る責務は不変であるが，児童一人一人が自分の命を守る意識やすべを身に付け，将来に渡って命を守り続けることができる力を身に付けさせていくのも学校の大切な責務だと痛感している。

カーネーションが繋ぐ思い

曽根　由美子（泉ヶ丘小学校）

主幹教諭として，新設校である愛子小学校に勤務していた時，震災が発生しました。

閖上から東部道路に駆け上がり，高速パトロール隊に救助された方々が夜中に愛子小学校に避難し，最後に避難所に入られたのは，ずぶ濡れになった町内会長さんでした。避難所においても地域の皆さんを気遣い，地域をまとめ，運営に協力してくださったことを思い出します。地域に戻られてから，土砂に埋まったビニルハウスの中で花を咲かせたという不ぞろいのカーネーションを新聞に包み，感謝の言葉とともに届けに来てくださったのです。今でもこの贈り物は続いていると聞いております。どんな苦難に出会っても，周囲の安否を気遣い地域をまとめようとするあの姿は，今，校長として学校経営を行う自分にとって学ぶべき姿であり，目標となっています。

本校は，今年6月「学校支援地域本部」が新設され，地域の協力体制も一段と強固になりました。地域との合同防災訓練は，2年目を迎えます。地域の外れに位置する本校ですが，活動の中心として地域との交流を深め，伝統文化の継承とともに震災の教訓を生かし，地域の心のより所となり地域に守られ育てていただけるよう，学校経営に当たりたいと思います。今日も大勢の地域の方々が，学校に足を運び協力してくださっています。

命と心を大切に

石田　裕子（南光台東小学校）

震災当時，私は教諭として向陽台小学校に勤務していました。950名ほどの児童の安全と避難所運営に冷静な判断と的確な指示をしていた当時の管理職の姿が思い出されます。

その3週間後，私は新任教頭として貝森小学校に着任しましたが，校庭の亀裂により授業の再開が大

幅に遅れました。そんな中，教育活動を進めるうえで，地域の力と卒業生の母校や後輩への温かい思いは大きな支えとなりました。震災は，命の尊さはもとより，人とのつながり，支え合いや助け合う心の大切さも教えてくれました。

あの震災を経験して，改めて，「命と心の教育」の重要性を痛感しました。これを新たな防災教育の柱として，どんな時でも冷静に判断し，自分で自分を守る自助の力，他の人や地域の力になる共助の力をしっかりと身に付けさせていく必要があると考えます。

また，防災教育は，「生きる」ことを考えさせる教育であり，たくましく生きる力を育てることにつながります。子どもたちが，夢や目標に向かってたくましく生きていくことこそ，何よりの復興の姿なのだと思います。地域や家庭の大人は背中で，そして学校は全ての教育活動を通して，生きていること，生きていくことのすばらしさを子どもたちに教えたい。その思いをもって学校経営に努めていきたいと思います。

大震災から学んだ地域の力

髙橋　鋼（幸町南小学校）

震災当時，東仙台小学校に勤務していました。今まで経験したことのない大きく長い揺れが収まったら，すぐに各教室等で机の下に潜っていた児童の様子や教室の状態を確認し，そして，体育館の安全を確認しました。児童を体育館へ誘導をし，引き渡しを始めると同時に避難者が体育館にどっと入ってきました。混乱の中で始まった避難所運営でした。そこでは現場での即断・即決が求められ，特に校長の的確な判断・指示の重要性を痛感させられました。

避難所開設２日目，避難してきた地域住民に対して校長の指示で避難所運営にあたる要員の募集を行いました。若い人を中心に積極的に手を挙げていただき，班の中心として連日活動してくれました。地域の方々の力の大きさをまざまざと感じました。

それから４年。着任した幸町南小学校では，避難所運営会議が先日も行われ，連合町内会を中心に避難所運営に当たる体制づくりが行われました。さらに補助避難所，地域避難所の選定も行い，基本的なマニュアル作成を行うことができました。これからはいよいよ実働体制づくりに入ります。今後は実際に動いてほしい若い方々に地域づくりに関心を持ってもらい，地域の力を最大限高められるよう地域を巻き込んだ行事や活動に，学校としても積極的に協力していきたいと思います。

子どもと共に，地域と共に

佐々木　友康（田子小学校）

震災時，私は丸森町の小学校に勤務していました。丸森町は，福島県境に接しており，福島原発の放射能被害が心配されていました。放射能という目に見えない恐怖，長期にわたる放射能対策に追われていました。学校再開に向けて，また，再開後の諸活動に対して，保護者，地域の方々が一丸となり学校を支えていただき，子どもたちのために御尽力いただきました。学校運営には地域とのつながり，人と人との関わり合いがいかに重要で，大切なものであると強く感じました。震災から４年５か月が経ちました。

本校は，津波の被害はありませんでしたが，これまでに被災した児童の転入は少なくありません。また，被災された方々等が入る復興公営住宅が学区内に建設され，被災児童の転入が増えることが予想されます。子どもたちの「心の復興」は，まだまだ必要であると感じています。現在，様々な形で学校支援ボランティアとして，多くの保護者，地域の方々に支えていただいております。多くの心と目で子どもたちを見守り，子どもたちが安心して学校生活が送ることができるように，笑顔あふれるワクワクできる学校を目指していきたいと思っています。今後も学校・家庭・地域のきずなをより一層深め，地域と共に歩む学校というスタンスを基盤に教職員一丸となって，確実な一歩を進んでいきたいと思います。

「新たな防災教育」の推進

千田　博史（泉松陵小学校）

この春本校に着任し，多くの教育活動が地域の方々の支援によって成り立っていると実感しています。昨年度は授業支援や防犯ボランティア等の活動で延べ2,500名もの方々にお世話になりました。今年度，例年秋実施の学区民運動会を５月実施に移行する際には地域の方々の絶大な御協力をいただきました。演技種目の練習や応援の旗作りを通し学年・学級への帰属意識を早期の段階から高めることができました。また，整然と整列し話を聞く姿や精一杯の演技に対して地域の方々の心からの拍手をいただいたことは子どもたちの大きな自信につながりました。また，地域連携行事が学年・学級経営に効果的に作用することを実感する機会となりました。互いに顔の見える関係づくりは，安心して楽しく暮らせる環境の構築につながります。このような地域との関係性は本市の掲げる自助・共助の力を育む「新たな防災教育」を推進する力となります。防災カリキュラムの自校化を進めるとともに，防災教育の視点を持って日常の教育活動を行うことが重要であると考えます。

グローバル化する社会の中，子どもたちは近い将来全国，全世界へ向けて旅立っていきます。彼らが，地域や職場で「さすが仙台で防災教育を受けた人だね」と頼りにされ，「仙台で育ってよかった」と実感できるように私たちは努力してまいります。

地域総がかりで子供を育てる体制づくり

熊谷　敏（沖野東小学校）

東日本大震災の夜の美しい星の輝きと，その数は，皆さんの記憶に鮮明に残っていることと思います。夜８時を過ぎた頃，引き渡しができていなかった児童を送り届けるために，その児童と二人で歩きながら「こんな満天の星空を普段なかなか見ることがないよね。」と，話していたことが忘れられません。

震災から学び得たことは，東日本大震災の教訓を風化させないためにも，いかなる場合も自分の命を守るために自分で適切な状況把握と判断ができるように，子どもたちへ指導していくことが大切であるということです。学校・家庭・地域が連携協力をして，地域総がかりで子どもを育てる体制づくりをすることが，今後の大きな礎となると感じています。

この沖野地区は「沖野学園」と称して，沖野中，沖野小，沖野東小で小中連携を図りながら地域との関わりを深めています。10月には，沖野中学校区の総合防災訓練を地域町内会，関係諸団体，そして行政とも協力をしながら実施します。沖野中学校区災害対策委員会を柱に実施するのは，今年で４年目になるそうです。毎年反省点を改善しながら，学校や地域の実情を踏まえ，訓練が更に充実したものになるようにと，検討を重ねています。私は，この「地域総がかりで子どもを育てる」という理念を大切にしながら防災教育にあたっていきたいと強く考えています。

編集後記

秋も深まり，校庭から望む秀峰泉ヶ岳も山全体が赤く色付く季節になりました。平成27年も残すところわずかとなり，会員の皆様には，何かと慌ただしい毎日をお過ごしのことと存じます。

さて，皆様の御協力により，会報「廣瀬川」88号を発行することができました。本号では，東日本大震災の教訓を踏まえた「新たな防災教育」の一つとして，ますますその重要性が増している「仙台市総合防災訓練」の実践報告や，児童数の減少に伴う学校統廃合という大きな課題を抱える学校の取組など，地域と連携し地域と共に歩む教育活動を紹介いたしました。また，仙台市小学校教育研究会の今年度の歩みや，新任の校長線先生方の復興に向けての思いや決意も掲載いたしました。お寄せいただいた提言や実践が今後の学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりますが，御多用の中，玉稿をお寄せいただきました校長先生方に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

（88号担当チーフ　鈴木記）

編集担当者：鈴木　茂美（根白石小）　髙橋　鋼（幸町南小）　安藤　雄一（中山小）